

- ♥ 公益社団法人Knots(結び目)は、「人と(ヒト以外の)動物の幸せな共生」をテーマに主に社会教育事業を行っています。
- ♥ Knotsが日頃お世話になっております素敵な皆さまから、メッセージを頂くシリーズです。

動物たちの存在はヒトの心に刻まれる——人間中心主義の転換へ

生後間もない乳児が人や動物を眼で追うことは、古くから知られています。

それに加えて、動物に関する記憶が他の事物の記憶よりも残りやすいことが、近年わかってきました。

例えば、「イス」「ネコ」「ハン」「ペン」：などの単語リストを記憶すると、動物を表す語(この例では「ネコ」)が他の語よりも思い出されやすいのです。これは生物進化から説明されています。

物は、捕食者または獲物となる可能性があり生存に重要であるため、認知機能の進化においてより強く記憶されるようになったというのです。

この説明はサバンナへの進出が人類進化(二足歩行や動物食などの獲得)の鍵とする「サバンナ仮説」が前提です。しかし、他の動物たちの存在はそれ以前に、ヒトにとって重要であったと考えられます。



捕食者や獲物の有無以前に、そもそも動物たちのいない環境は生存困難な環境であり、動物たちが多くいる環境は住みよい環境です。これが認知できずし

て、ヒトはサバンナへと進出(いや、「参入」と言うべき)したのでしょうか。

心理学ではまた、伴侶動物の「効果」の研究が近年見られます。

例えば、飼育動物を自ら世話することが児童の学校適応に良い効果を及ぼし、学校に飼育動物がいるだけでは効果はなかったという研究報告があります。

これを否定しませんが、屋根と網で覆われたケージや水槽で飼育されている動物たちの

ことと、そのような「飼育」による児童たちへの影響も考えなければなりません。

鹿たちが自由にのんびり草を食んでいるキャンパスで、私は平和な奈良の地を実感しながらそう思います。

そして、ウクライナ、ガザ、戦渦にあるすべての地域が、一日も早く人々と動物たちにとって平和で住みよい地になることを祈ります。

天ヶ瀬正博(奈良女子大学文学部心理学コース教授、奈良県うだ・アニマルパーク「いのちの教育」研究協議会員)